



冬の

てきすとぽい スペシャル掌編集



ドジっ子
サンタだったたり

ダンディな
盲導犬もいたり

ちよっぴり切ない
お姉さんだったたり

とある少年が
フシギ体験したり

七面鳥が
逃げていたり

森の魔王の
土くれって?

秘密の島で
冒険だ〜

もくじ

01.はじめに（てきすとぼい&収録作品について）

02.「サンタの逃走」 ayamarido

03.「はつゆき」 しゃん

04.「ホーリー」 大沢愛

05.「吾輩は猫ではない」 茶屋

06.「真夏の冒険」 碓氷穰

07.「もりのほし」 碧

08.「プラントハントランド」 犬子蓮木

09.みんなにハッピーあれ（この本がでけるまで）

[スペシャル・サンクス](#)

表紙デザイン：森™

アドバイザー：U.C.O.

ダウンロードしてくれたみなさんへ

ここに掲載された掌編は、すべて小説投稿サイトてきすとぽいに寄せられたものであーる。

てきすとぽいは、ツイッターのアカウントを持っていれば、ダレでも参加できるサイトなのだ。

<http://text-poi.net/> ←これ、URL。

毎月開催の「てきすとぽい杯」をはじめ、さまざまなイベントが行われていてー。

たくさんの投稿者が、主に短めの小説を書いているのであーる。

この本ができた経緯については、あとでお話するのでー。

まずは笑ったり、しみりしたり、じーんとしたり、にやったり。

それぞれの物語を楽しんでちょ。

なお、作品の多くがクリスマスを題材にしているけどー。

それは、当初、クリスマス用の掌編をボクちんが募集したからであーる。

でも、ちょっとした事情があって、クリスマスに間に合わなくてー。

本のタイトルも「冬のスペシャル掌編集」にしたのだ。

ちなみに、この電子書籍にはコンセプトが一つあってー。

養護施設のよい子たちに読んでもらうことを前提にしているのもあーる。

クリスマスからだいぶ遅れたけど、参加者全員ハッピーな聖夜を過ごしてもらおうと書いた
のでー。

一人でも多くの目に触れたら、これ幸いなのであーる。

と、理屈はこのへんにして、7つの作品をどうぞ。

短いお話ばかりだから、さくっと読めるよー。

ほんじゃ、かいま〜く。

※収録作品のうち、6作品は「みんなで、ほっこり ハッピー・クリスマス掌編賞」ちゅーイベントに寄せられた小説である。

犬子蓮木作「プラントハントランド」のみ、「第10回 てきすとぽい杯」投稿作品から特別に転載させてもらってまふ。



まじめなサンタクロースがいました。

年はまだまだ若いけれど、時間にきっちりしていて、トナカイの面倒もよく見るし、何といっても、子供の欲しがるものを何一つ間違えることなく届ける、そんな立派なサンタでした。

今年もクリスマスが近づいてきました。

先輩サンタも、おじさんサンタ、おじいさんサンタたちも忙しく働くようになります。

プレゼントづくりや、きれいなラッピング。

材料費の支払い。電気、ガス、薪（まき）、水道料金の精算。

トナカイのえさ代の支払いもこの時期にまとめて済ませますし、何よりたいへんな、寄付金団体へのお礼状作成と、新年に向けての寄付金のお願ひもあります。今年から、電子マネーでの寄付受付ができるようになったので、そのままの元ネタシステム調整も必要です。

それから、ここ数年でどんどん複雑になっているのは、子供のいる家や、その近所に張り巡らされた、セキュリティ・センサーの解除作業です。これをせずに、今まで何人ものサンタが逮捕されて、赤と白の服を着たおじさんたちが新年を留置場で迎える、なんてことが何度もあったので、セキュリティ対策チームは、パソコンの画面を睨みながら毎年、目を真っ赤にして頑張っているのです。

もちろんトナカイたちも、いつでも空を駆けて行けるよう、足踏み、ストレッチを欠かしません。

さて、この若いサンタも、クリスマスに向けて一生懸命、仕事をがんばっていましたが、十二月になると、だんだんと、浮かない顔付になってきました。

心配なことがあるのです。

「どうしたんだ、サン太。浮かない顔付じゃないか」

先輩サンタが、若いサン太に声をかけました。

「もうすぐクリスマス本番だ。今のうちに、しっかり休んでおかないといけないぞ」

「はい。大丈夫です」

サン太は、そう答えましたが、やっぱり心配ごとがありました。

でももうすぐクリスマス。

仕事は山積み。毎晩、残業が続いているし、サンタクロース協会のまわりも、もう雪で真っ白になっています。とても、心配ごとに構（かま）っている暇はありません。

「サン太のやつ、クリスマス・ブルーってやつかな」

「本番が近づくとつれて不安になる心理か」

「ひょっとしたら、うつ病じゃないか。セロトニンが働いてないんだ」
仕事をしながら、先輩サンタたちもあれこれ心配します。

実は、このサン太が心配しているのは、おならでした。

サン太は緊張すると、たいそう勢いの良い、おならが出てしまうのです。

しかも並たいていの、おならではありません。

去年のクリスマスでは、すやすや眠る五歳くらいの、まつ毛の長い、愛らしい女の子の頭の上で、ボフッ、とやっと思い、危うくその子がベッドから転げ落ち、泣き出してしまうところだったのです。

「僕のおならは臭くない。でも……」

大きな音で子供が目覚め、泣き出し、びっくりした親が飛び込んできて身柄確保、警察が呼ばれ、手錠かけられ留置場へ……なんてことは、サンタクロースとして、絶対にあってはいけないのです。

「何とかしなくちゃ。でも、どうしたら……」

不安になるうち、またサン太のお腹が痛くなってきて、ブッ、とおならが出ます。

忙しいうちに、時間はどんどんと過ぎていって、もうクリスマス・イブ。

ずらりと並んだサンタたちが鈴をシャンシャン鳴らして、出発式。

そして日暮れとともに、サンタたちのそりが、世界中へ出発して行きます。

サン太は、お腹とお尻を押さえながら、自分の出発順が来るのを待っていましたが、不安は強まる一方です。

「大丈夫だ。僕はできるよ。……大丈夫、去年もうまくやれたじゃないか」

そう呟いてみても、お尻の方にだんだんと、おならが蓄積（ちくせき）されて行くのが分かります。

やがてサン太もトナカイにまたがって、いざ出発、と鞭（むち）でトナカイの尻を叩こうとしたところで、今は隠居（いんきょ）している長老のサンタが、その手を止めました。

「サン太や。そりで行くのではないのかえ？」

「はっ」

サン太は、自分が競馬のジョッキーみたいに、トナカイにまたがっていることに気づいて、慌てて飛び降りました。

おならのことで頭がいっぱいになって、勘違いしてしまったのです。

「サン太や。何をそんなに心配しておるのじゃ？」

「いえ、僕は別に……」

「おまえはまじめで、良いサンタクロースだ。何も心配することはない。……だから、おならぐ

らい、気にすることはない」

「えっ！」

サン太はびっくりして目を丸くしますが、長老はニコニコとしたまま、
「わしも長いことサンタクロースをしてきた男じゃ。若い者が何を欲しがっているか、どうしたいかくらい、お見通しだよ」

と、そんなことを言います。

長老は、傍らの丸太へどっこらせと腰をおろし、持っていたパイプを、うまそうにくゆらせると、

「わしも若い頃は、配達中、よう屁をこいたものじゃ」

「長老も？」

「そうじゃ。だがわしは全然、平気だった」

「でも、大きな音がして、子供が起きてしまったら」

「屁をひるには、コツがあるのじゃ。溜めて溜めて溜めて、一気に出せば、そりゃあ大きな音が鳴る。だから小間切れに、ちょいちょいと、漏らして行くのじゃ。少しずつなら、大きな音も出ないじゃろ？」

「そうでしょうか？」

サン太は半信半疑でした。長老の言うとおりにかもしれませんが、サン太のおならは、小間切れにしても、けっこうでかいのです。

「あと大事なのは。出発前に思いきりすることだな。ここでなら、何ぼでも大きなものをしてても平気じゃ。幸い、他のサンタはみな出発した。心置きなくおならをして、それから出発すれば大丈夫じゃ」

「……そっか、そうですね。わかりました、長老！」

サン太はうれしくなって、そりから降りると、

「じゃあ出しますので、長老はそこの、もみの木にしっかりつかまっててください」

「え、木につかまる？」

「行きますよ。そーれ！」

お尻をまくったサン太は、思いきりおならを放出します。

ポガーン！！

「あひゃあ！」

今まで我慢してきた分、ものすごい威力。

辺りの雪は吹き散らされ、長老は、ものすごい彼方に吹っ飛ばされて星になってしまいました。

サン太は気分すっきり、意気揚々（いきようよう）、

「ありがとうございました、長老！ プレゼント配達に行って参ります！」

びしりと星に敬礼して、トナカイのそりに乗りこむと、白い息を吐いて、受け持ち地区である日本の関東エリアへと出発したのです。

十軒、二十軒、三十軒。

サン太は次々とプレゼントを届けて行きます。

どの子もかわいらしい寝顔で眠っていて、サン太は、明日の朝、この子たちがプレゼントを見つけてどんなふうに喜んでくれるかと思うと、自分もうれしくなってきました。

おならも、なるほど長老の言ったとおり、細かくきざんで行けば大きな音は出ません。

そりを降りて、ぷっ。

セキュリティ・アラームを解除して、ぷっ。

鍵をこじ開けて、ぷっ。

廊下を忍び足で進んで、ぷっ。

ぷっ。

ぷっ。

ぷっ。

寝静まった子供の枕元へ来る時だけは、ちょっと我慢して、そっとプレゼントを置いて部屋を出るときに、また、ぷすっ。

廊下を戻って、ぷすっ。

足あと、指紋を丁寧（ていねい）に拭き取って、ぷすっ。

ドアを開けて鍵を閉めて、ぷすっ。

セキュリティ・アラームを復旧して、ぷすっ。

そりに戻れば気が緩んで、ぷー、ぷぷぷすん。

「これなら大丈夫だ。長老の言ったとおりだ」

そうやって、サン太が楽しく百軒ほど配り終えたところでした。

とある女の子の部屋へ忍び込んだとき、

「サンタさんへ」

と書かれた手紙が、枕元に置いてあったのです。

読んでみると、

『えー、いつもお世話さまです。毎年のごことでたいへんだと思いますが、がんばってお勤めいただくことを子供一同、切にお祈り申し上げます。さて、これは些少（さしょう）ながら、お使いいただければと思い、設置させていただきました。※おならの件、誰にも申しておりません。ご安心ください。かしこ』

と、丁寧なメッセージと一緒に、ワインのコルク栓が同封されていたのです。

「はっ」

と、サン太が思い出したのは、この、目の前で今ねむっている女の子こそ、去年、枕元で大きなおならをしてベッドから吹き飛ばしてしまい、親が出てきて、危うく身柄を確保されそうになった、その子ではありませんか。

もう小学生になったくらいでしょう。

相変わらず、まつ毛の長い、愛らしい寝顔をしていましたが、サン太は、

「こいつ、去年の尻のことに気づいていやがった」

と、真っ青になりました。

「何てことだ。俺の、あんな失態を記憶しているなんて。寝ぼけていたから覚えていないと思ったが、畜生……協会の人間に知られる前に、いっそのまま絞め殺して」

なんて、サンタクローズにあるまじきことが頭をよぎりましたが、そこはやっぱりサンタクローズなので、

「ありがとうね、春海ちゃん」

と、やさしく頭を撫でました。

そして枕元にプレゼントを置き、かわりに手紙と、彼女からのプレゼントのコルク栓を手にとると、

「これはありがたく使わせてもらうよ。春海ちゃん。メリー・クリスマス」

そう微笑み、コルク栓を、きゅっとお尻に差し込んで、部屋をあとにしました。

コルク栓は、案外お尻にフィットしました。

もうおならは出ません。

シャンシャンシャン。

シャンシャンシャン。

鈴の音を鳴らしながら、サン太はさらにプレゼントを配って行きます。

二百軒、三百軒、四百軒。

そうして、かれこれ、七百八十軒ほども配り終えたところでした。

さすがに緊張と、疲労から、サン太のお腹に、相当なおならゲージが蓄積されてきました。

でも残りは十軒だけです。

「大丈夫だ、もうすぐ終る」

おしりのコルク栓のおかげで、今年は誰にも迷惑をかけずに、プレゼントを配り終えることができそうです。

「これなら、最初からコルクをしてくればよかった」

と、そうやって油断したのが、いけなかったのでしょうか。

栓をするまでは、自然と、音もなく漏れ出ていたおならが、どうやら今は完全にお腹にたまったまま、行き場を失っていたようなのです。

「よし、次が最後だ……」

とあらかじめ配り終えたところで、サン太はもう我慢できないくらいに、おならがしたくなっていました。

最初、調子良くおならを出し続けていた分、お腹の方も、遠慮なくおなら成分を生産し続けていたのです。

もう限界です。

「で、でも、あと一軒だけだから……」

と、次の家に向けて、袋からプレゼントを取り出そうとして、サン太は、あっと思いました。
「無い。プレゼントが無い……！」

何てことでしょう。

きっちり人数分を用意してきたはずのプレゼントが、一つだけ足りないのです。

誰かのところに二つ置いてきたのでしょうか。

けれど、プレゼントは全部、ICタグとバーコードで管理しているので、間違えることはありません。

では途中で落としてきたのでしょうか。

あり得るとしたら、それだけです。

「何てことだ。たいへんだ！」

真っ青になって、サン太はソリを切り離し、トナカイにまたがると大急ぎで来た道に戻ります。

またがった時に、お尻の栓がいよいよきつくお尻の中に押し込まれましたが、そんなこと気にしているわけではありません。

「行くぞ、ルドルフ！」

ピシッ！

ビシッ！

トナカイの尻を鞭打ち、全速力。

気がつけば、東の空がうっすら白んできています。

「もうすぐ朝だ。どうしよう、配達漏れだ。遅延（ちえん）だ、制裁金だ！」

サン太はいよいよ不安を募（つの）らせ、神経をすり減らしてプレゼントが落ちていないかを探しますが、どうしても見つかりません。

住宅団地、公園、駐車場。

駅前、スーパー、公衆トイレ。

どこにもありません。

「ああ、もうダメだ。もうダメだ。どうしよう、どうしよう……」

不安になるにつれ、お腹がどんどん痛くなってきます。

「ノルマが達成できなければ、リストラされてしまう。クビだ。せっかく就職できたのに。リストラ……それだけは嫌だ。それだけは嫌だ！」

リストラされたサンタクロースは、サンタ衣装のカーネルおじさんにされてしまうのです。

サン太は必死になって、プレゼントを探します。

もちろん、おならも苦しいです。プレゼントを探しながら、お腹とお尻を押さていると、おならがどんどん貯蓄されているのが分ります。目もくらくらしてきました。

「う、うう……」

でもそんなことを気にしている時ではありません。

だいたい、ここでお尻の栓を抜いたら、どんなに猛烈なおならが出るのか、知れたものではないのです。何より、最後のプレゼントが見つからないまま、朝が来てしまっは、サンタ失格です。

「時間がない。ああ、どうしたら良いんだ」

と、泣きたい思いで、サン太がもう一度、iPadの配達リストを確認したときでした。

「あれ、この子は！」

そうです。

最後の子が欲しいのは、物ではありませんでした。

彼女が欲しいのは物ではなく、サン太が特別に用意できること。だから、この子は最後で、品物を用意していなかったのです。

「何だ、無くても良いじゃないか。最初から無かったんだよ！」

サン太は勘違いにもほどがあるぞと、自分が情けなくなりましたが、とにかく急いでプレゼントを届けなくてはなりません。

「この子は、空を飛びたいんだよ！」

サン太は大声をあげました。

でも東の空は、もう明るくなっています。

朝です。

朝日がのぼるまで、あと何分も無いでしょう。

「急ぐんだ、ルドルフ。絶対に間に合わせるんだ。この子に空を飛ばせてあげるんだ」

サン太の計画では、最後の子は、ソリに乗せてあげるつもりでした。

ソリに乗せて、夜空を自由に走らせる。

そうすればきっと、その子は夢の中で、サン太のソリに乗って、空を飛ぶような気持になるでしょう。

でももう朝です。時間がありません。

「よし、こうなったら！」

と、サン太は、疾走（しっそう）するトナカイの上に立ち上がりました。

冷たい風が、びゅんびゅん耳を通り過ぎて行きます。

そして、最後の子の家が見えてくると、くるりとお尻をまくって、
「空を飛んだ、ののちゃん！」

あ、ちなみにその子の名前は、旭川の子。

小学四年生の、かわいらしい、生き物係の女の子でした。

ぶぼが一、ぼふんッ！

.....

.....

クリスマスの朝、目が覚めたら、わたしは空を飛んでいました。

つめたい空気。

まぶしい朝日。

目の前に、わたしの住む町が広がって、白く輝いていて、いつもの公園、スーパー、ママと行く駅前のデパート、それから、もうすぐクラスの澄佳たちと出かける映画館。

ぜんぶが、きれいに見えていて、手を伸ばせば、ぜんぶにさわれそうでした。

「メリー・クリスマス、ののちゃん」

隣には、若いサンタさんがいました。

真っ白なひげが無いので、何だかサンタさんではなく、パパのように見えたけど、そのサンタさんは、すごくすっきりとした、晴れ晴れとした顔をしていました。一晩かけて、たくさんのプ

プレゼントを配り終ったサン太さんは、きっと、こんな顔をしているんだろうなって思う、そのままの顔です。

「空を飛びたい、という君の願いを、叶えに来たんだ」

「本当に、サンタさん？」

「そうだよ。メリー・クリスマス、ののちゃん」

若いサンタさんは、にっこり笑いました。

それからわたしは、朝の冷たい空気をおもいきり吸って、両手を広げ、足を伸ばして、空を飛びました。

寒かったけど、とても嬉しくて、楽しくて、不思議とあったかい気持ちになりました。

それから私は、サンタさんのソリに乗って、シャンシャンシャン、という、静かな鈴の音を聞きながら、町の上をぐるり、ぐるりと、ゆっくり何度もまわりながら、おうちへ帰りました。

家は、めちゃめちゃに壊れていました。

お母さんは、いきなりの竜巻で屋根が吹き飛ばされたって言いました。近所中の窓ガラスが割れています。

私は、ソリに乗って一目散に逃げて行くサンタさんの背中を見送って、あいつを絶対に許さないって決めました。

(了)



さて、どうしたものか。

散歩をしながら、おれは考えていた。

悩んでいるというほどのレベルではないけれど、課題があることは明らかだ。

まさか、こんな事態に直面するとは思ってもみなかった。

まったくマチコさんのお人よしにも困ったものだ。

よりによって、おれ以外の犬を飼うことにしてしまうとは。

「ねえ、おじちゃん。あっちへ行こう、あっち」

広々とした公園の芝生に興奮しながら、チビが話しかけてくる。きょうはいつもより寒いというのに、やたらと元気がいい。おれは聞こえないフリをしながら、マチコさんの左側をゆっくりと歩く。チビのリードもにぎっているせいで、満足に杖（つえ）をあつかえていないのが気がかりだ。

目の見えないマチコさんが安全に外を歩いたり、家の中で簡単にリモコンを探せるように、おれがいるのに。やんちゃな坊主と一緒に散歩では、どうしたらいいのかわからない。

でも、マチコさんは、なんだかとっても楽しげだ。ぐいぐいと先に進もうとするチビにリードを引っ張られているのに、おだやかに笑っている。実際、マチコさんはとてもやさしい人なのだ。おれはこの人のパートナーになれて、心の底からよかったと思っている。

「あれ？ あら？ あらら？ マチコさん。どうしたの、その子」

ベンチが並ぶ歩道に差し掛かると、ふとそんな声かけられた。

「あ、その声は川田さんね。びっくりした？ この子、チビっていうの。小さくてぷっくりとして、小熊みたいでしょう」

買い物袋をさげた川田さんは、文字通り目を丸くしていた。チビはしきりに尻尾をふって、川田さんの顔を見上げている。言われてみれば、ほんとうに小熊みたいだ。実際に小熊を見たことはないけれど、きっとチビみたいにころころしているにちがいない。

「おじちゃん、この人だあれ。少しだけ、おじちゃんのおいがしているね」

こっちを見たり、川田さんに愛嬌（あいきょう）をふりまいたり、チビはなかなか忙しい。少し落ち着かせるべきだろうか。おれはチビに向かって、こっちへおいでと話しかけた。

「この人は川田さん。マチコさんの友だちだよ。うちにもよく遊びに来るから、おまえもちょくちょく会うことになるだろう」

「へえ。でも、この人さっきから、こっちをじっと見ているよ。ぼくの顔に何かついているのかな」

チビは川田さんの足もとに鼻先をくっつけ、くんくんとにおいをかいだ。散歩中もしずかにしているおれとは大違いで、えんりよがない。やれやれ、チビを見る川田さんの視線も、びみょう

に心配そうだ。それも当然かもしれない。なにしろ、誰がどう考えても、チビは盲導犬の訓練なんて受けていないんだから。

「チビちゃんって。マチコさん、その名前、まんまじゃないの。それにしても、人なつこそうで可愛い子ね。ただねえ、一緒に散歩してあぶなくないの？ この子、ふつうの犬みたいけど」

あははと笑ったあとで、川田さんは素（す）にもどった。こんなとき、人間もあちこちに気を配って大変そうだな、とおれは思う。

「あら、そんな心配しなくても大丈夫よ。わたしには、ユーリーがいるんだし。それにチビは、面白い子なの。わたしが『ペトルーシュカ』を弾くと、気持ちよさそうに吠えるのよ」

マチコさんの仕事はピアニストだ。チビはピアノの音色が好きなようで、マチコさんが練習をしているときは、そばにぴたりと貼りついていて。とくに『ペトルーシュカ』の目まぐるしく変わるリズムがお気に入りらしい。その曲が始まると、チビはゴムまりを追いかけるようにしてピアノのまわりをぐるぐると走るのだ。

マチコさんはチビが好きなんだな、と思う。音楽仲間の家へ遊びに行ったとき、甘えた鳴き声を耳にして、めろめろになってしまったのだ。マチコさんはいい大人なのだが、そんな風にして、いきなり子犬を連れ帰るようなとうとつな行動をとることがたまにある。

さて、どうしたものか。

おれはこっそりと、もう一度つぶやいた。

冬がどんどん深まっている。さっきも、おれは川田さんの足音に気づけなかった。

これは、まいったな。

盲導犬として、おれは少し歳をとりすぎたのだろう。下手をすると、今年の冬が最後かもしれない。注意力がおとろえた盲導犬は、いつか飼い主に迷惑をかけることになる。

柄にもないことは、つくづく考えるものじゃない。

おれの鼻からは、枯れ葉がまう北風のようなさびしげな溜め息がもれていた。

U · x · U

U · x · U

川田さんとの世間話をすませて家に帰ると、マチコさんは部屋のヒーターをつけた。

もうじきクリスマスね、とこちらに話しかけながら、コーヒーをいれる。

キッチンにいるときも、おれはマチコさんと一緒だ。コーヒーのいい香りがする。おれはマチコさんが物を落としたりしないか、つねに手の動きを見張っている。

「ねえ、おじさん。なんだか、おかしいんだ」

チビがとなりのリビングで呼んでいた。あまり話しかけないようにとクギをさしているのに、チビはおれとの立場の違いを理解していない。おれはペットではないし、仕事がある。ただ、チビはまだ子供だ。そんな難しい話は、わからなくてもしかたがない。

「おかしいって、何が？」

「えっと、窓の外。今までに聞いたことがない音がしているよ」

ためしに耳をすませてみる。でも、おかしい音なんて聞こえない。夕方をむかえて、窓にはカ

ーテンがかかっていた。おれたちがケンカしていると勘違いしたのか、カップにコーヒーを注ぐマチコさんが、どうかしたのと心配そうな声で聞いてきた。

「今までに聞いたことがない？ たとえば、それってどんな感じだ？」

「え？ おじさんには聞こえないの？ 小さな音がたくさんするんだ。でも、こわい音じゃないから、安心して。やさしくて、ふわっとしているんだよ」

「ふわっと？ おまえ、そんなのが聞こえているのか？」

「綿が落ちてくるみたいな音なんだ。どうして、おじさんには聞こえないのかな？」

「なるほどな。その音が何なのか、だいたいわかったよ。そう言えば、きゅうに寒くなってきたものな」

コーヒーカップを手にしたマチコさんが、リビングのテーブルに腰かけた。じっと耳をすませたあとで、あら雪かしら、とつぶやいた。ずっと遠くで走っている車の音も、シャリシャリシャリとっている。今なら、おれにもわかる。外では、この冬はじめての雪がふりはじめたのだ。

「ほら、おじさん。聞こえない？ ふわっとしているよ。なんだか、楽しそうだね。ぼく、もう一度散歩に行きたいな」

「ああ、あれは雪がふっているんだ。そして、おまえは空から冷たい雪のふる音を感じ取れた。なあ、チビ、おまえに頼みがあるんだけど、聞いてくれるかな？」

一呼吸おいてから、おれは切り出した。耳が遠くなった盲導犬は、飼い主を完全に守ることができるのだろうか。マチコさんも耳はいい方だけれど、外を歩けば思わぬ危険と出くわすことだってあるはずだ。

「頼み？ めずらしいね、おじさんがそんなことを言うなんて」

「たいしたことじゃない。けれど、大事なことなんだ。もし外を歩いているときに、おかしい音を聞いたら、すぐに知らせてくれないか。自転車の急ブレーキの音、誰かがこっちへ走ってくる音、ビルから何かが落ちてくる音。なんでもいい。そんなものが聞こえたら教えてほしい。そうじゃないと、マチコさんがケガをする かもしれないんだ」

へえ、と小さく声をもらすと、チビは真剣な表情でおれの言葉を繰り返した。

「あぶなそうな音がしたら、すぐにおじさんに知らせるんだね。そうしないと、おばちゃんがケガをしちゃうから」

「そのとおり。マチコさんがあぶない目にあったら、餌をもらえなくなるかもしれない。そうしたら、おまえだって困るだろう？」

うん、と明るくうなづくチビの顔をおれはぺろりとなめた。

考えたら、ほかの犬の顔をなめるなんて久しぶりのことだった。どうしてそんなことをしたのだろう。じぶんでもわからないけれど、勝手にからだが動いてしまったのだ。

マチコさんはふいに立ちあがり、ピアノの前に座った。『サンタクロースがやってくる』のにぎやかなリズムが、部屋の中ではねている。

さて、どうしたものか。

ふだんはしない無駄吠（むだぼ）えをすると、マチコさんが驚いたようにこちらを振り向いた

「あら、ユーリー、どうしたの？　あなたが、そんなにうれしそうに鳴くなんて。ケンカをしていたんじゃないのね」

おれは床に伏せると、ピアノの調べを聴きつづけた。チビは、まだ頼りない。でも、むかしはおれもそうだった。

「チビ、テーブルの上ののっているあの細長いのはリモコンだ。マチコさんが探しているようだったら、わたしてあげるんだ。ごほうびに、ビスケットがもらえるかもしれないぞ」

盲導犬は人間から訓練を受けるけれど、それだけがすべてじゃない。これからは、おれたちはコンビだ。もう一度、おれはチビの顔をぺろりとなめた。

初雪が何かを祝福するように、しずかに音をたててふっている。鍵盤の上では、マチコさんの指が小鳥みたいに軽やかにおどっている。

メリー・メリー・クリスマス。

少しはやいけれど、おれは心の中でそっとつぶやいた。



カーテンの間隙から見える梨地（なしじ）ガラスの内側は細かな水滴に覆われていた。お向かいの阿賀山さんは毎年12月になると壁面に色とりどりのイルミネーションを這（は）わせる。LEDをネットにちりばめてドレープのように流したり、波や花火を象（かたど）ったり。通り過ぎる車のハンドルが一瞬だけふらつく。今日は12月24日。明日でイルミネーションは終了だ。週末には朝から大掃除を兼ねた撤去（てっきょ）作業が行われるだろう。五年前は脚立（きやたつ）のそばではしゃいでいた阿賀山家の男の子も、二年前からは手伝おうともしなくなっていた。

窓枠から離れる。明かりのついていない部屋の中はノートPCのLEDが細かく瞬（またた）いている。壁際のオイルヒーターが作動しているおかげで、吐く息はかろうじて白くならずすすんでいた。床の上にはコートとセーター、シャツが脱ぎ散らされて、なぜかジーンズだけが椅子の背凭（せもた）れにかけてある。壁際のベッドに視線を移す。弟のヒロトが毛布と布団を互い違いにかけて寝息を立てている。帰りが遅いと母親に叱られて反論し、父親の一喝に遭って部屋へ引き揚げたのはほんの一時間前だ。かすかに喉が鳴る。

週に一度、母親が掃除機をかける上に消臭剤も置いてある。それでも部屋には脂じみたにおいが漂っていた。丸まったパジャマをよけてベッドに近づく。暗がりの中で目を凝らすと、ヘッドボードの上辺に赤と緑のかわいらしい靴下が掛けてあった。

ちょww、なんだよこれ。もう高校一年生だから枕元に靴下を置くわけがないって思ってたけど。これに何を入れてもらうつもりなんだよ。iPodとか？ でもケースとか全部破棄して中身だけ入れることになるよ。殺伐（さつぱつ）としたプレゼントだなあ。そんなので嬉しいの？ 本当にアンタ、いつまで経っても考え無しのままだね。万札でも入れろってか。もしそうなら、ちょっとお姉ちゃんの方へおいで。張り倒してあげるから。小学五年生の弟を張り倒すことに関しちゃ、ちょっと自信があるからね。ぎりぎりのところで泣かずに踏みとどまって、でも最後のひと言で泣き出すくらい。泣き声を聞きつけた母さんが飛んで来れば、どうせ私が叱られるんだよ。だからアンタ、わざと大袈裟に泣いてみせるんだよね。本当、子どもって汚いよなあ。でも私が、すぐ泣くのは男の子じゃない、泣けば泣くほど萎（しぼ）んでいて女の子になっちゃうよって言ったら、泣かなくなったんだよね。それからは本気で張り倒せるようになった。馬鹿だけど、可愛かったよ。

ベッドの縁に腰を下ろす。部屋のおいが濃くなった。暗がりを透（す）かして弟の顔を見つめる。

なんだかおっさんくさくなってない？ ああ、鼻の下にうっすらと髭が生えているからか。

つるつるだったくせに、まあすっかりケダモノ化しちゃって。それにしてもこの香りは、ムスク？ ちょっと勘弁してよ。ああそうか、ミホちゃんだっけ？ その靴下、あの子に貰ったんじゃない。五月に告って付き合い始めて、初めてのクリスマスかぁ。プレゼントが靴下ってしょぼすぎるみたいだけど、もちろんメインは違うんだよね。一大決心ってやつ。それなのにアンタはまあ……。いいんだよ、それで。世の中にはね、いい加減にやってうまく行くよりも、一生懸命にやったけど失敗するほうが気持ちが伝わるってこともあるんだから。あ、でも二度目はないからね。半端な気持ちでなし崩しに、みたいなことをやったら、お姉ちゃん、本気で張り倒すよ。この件に関してだけは、お姉ちゃん、弟のアンタよりも女の子の味方だから。

暗がりの中に机が見える。鞆が置いてある。奥の本棚にはところどころ逆向きに参考書が挿（さ）してある。上には英和辞典の箱が載っていて、中にプリントが詰め込まれている。辞書の中身は見当たらない。

ああ、こりゃ勉強してないね。高校入試をひーひー言いながらクリアしたのをもう忘れたのか。ちっとは懲（こ）りなよ、まったくもう。あの鞆（かばん）、家に帰ってから一度も開けていないし。そりゃ未提出のプリントが溜まって点も引かれるよ。ていうか、こんな感じで12月まで来てちゃ、けっこうやばくね？ あと、枕の下から覗いているそれ、絶対にばれてるよ、母さんにも。あの子と会って来たときくらい控えろっての。それにしても、なんかこう、うすらデカくなったね。後頭部に蹴りを入れても大丈夫だったりして。小学校のときには私が右手でアンタの喉を掴んで肘を伸ばしたら、いくら手を振り回しても足を振ってもまるっきり届かなかったんだよね。アンタ、ぴーぴー泣いてさぁ、かわいそうっていうよりもおかしくて。げらげら笑ってたら母さんにぶん殴られたっけ。あれは痛かった。なんだか涙が出た。いや、痛かったからじゃないと思う。何だったんだろ。ねえ、アンタ、憶えてるかな。

棚の上に丸い影がある。サッカーボールだった。小学校のときに両親にねだって買ってもらったものの、地面の上で蹴るのは汚れるから嫌だと言って、以後は飾ったままになっている。

アンタってそうだよな。どう頑張っても体育会系にはなれない。小学校のときってスポーツができる順に人気があるから、まあどうしようもなかったね。中学校も三年くらいになるとさすがにスポーツ馬鹿の底が割れて来るから相対的にランクは上がるけど、でもアンタは単なる馬鹿だからな。汗臭いイメージがなくて坊主頭でもないってだけで。でも背が伸びてきたおかげでそれなりに見てくれはよくなった。あのころ175cmだったっけ。私と同じかぁ。生意気な。頭が回らなくてあんまり喋れないのをクールだと勘違いした女の子を一時的に惹（ひ）きつけるくらいにはモテたでしょ。でもさぁ、アンタに寄って来たのって、ヤンキー系の男の子ともめて続かなくなった子ばっかじゃん。うっかり付き合ったらシャレにならないことになったかもよ。まあ、いざとなったらヘタレで自分じゃ何も決められなかったからよかったけど。

床に落ちたコートに、カーテンの隙間からイルミネーションが射し込んでいる。ポケットからはみ出したリボンが、ときどき金色に光る。

でもさ、こうやって普通にクリスマスイブを祝えるようになったんだね。なんだか安心したよ。だいたいさあ、キリストの誕生日と命日が重なるって、どういう冗談だよって。祝っていいんだか悔やんでいいんだか。父さんも母さんも、アンタが中学二年になるまではケーキも買って来なかったよね。世間じゃロウソクに火をともしているときに、うちじゃロウソクと一緒にお線香にも点火してたんだから。お仏壇に手を合わせて、冥福を祈るような誕生を祝うような。死と再生？ 再生と死？ 前者にしとこう、うん。サンタクロースにプレゼントをお願いするっていうギミックはあっという間に廃（すた）れたっけ。直前になって父さんがぼそっと、欲しいものはあるか、って訊くんだよね。あ、思い出した。あのときアンタ、いらなんて言ったんだよ。欲しいものいっぱいあったのにさ。本当、馬鹿だねー。予算は二倍になったんだからガッツリ頼めばよかったのに。

ベッドの上で軽く飛び跳ねる。何の音もしない。弟が口をもごもごさせながら寝返りを打つと、マットレスのスプリングが軋（きし）んだ。

アンタ、もし起きていたら絶対言うよね。「イブの夜に弟の部屋で何してるんだよ。さっさと男のところへ行けよ。」ってさあ。はいはい、ていうか、うるせえっ！ 行ってきたよ、一応は。けど、他の女としっぽりくっついてるそばで何しろってのよ。なんかああいうのってさ、腹が立つっていうか萎えるよね。いいオッサンになりやがって。よく見りゃ女の方もけっこうな年齢じゃん。あんなのと昔は同い年だったなんてね。五年前のあのころも私に隠れて逢ってやがったんだけどさ。それから五年間、飽きもしないで続いてたんだ。ほっといてやるよ。「他に行くところはないの。」……ねえよ。正直、アンタの部屋でこうしてたかったんだよ、今夜はね。

部屋の隅に四角い影が聳（そび）えている。床からの反射光がファンシーケースのカトリア模様を撫でる。

ああ、あれ、私の部屋にあったやつだ。あれ超ダサくって、嫌いだったんだよね。早く壊れないかなって、わざと乱暴に開け閉めしていたらチャックのところが裂けて。やったー、これでウツの衣装ケースにしてもらえるって……え？ うわっ、コレ補修してある。それもボンドで!? 貧乏くさっ。ていうか、アンタの仕業よね。こんなの使っていないでさっさと買い換えてもらえばいいのに。本当にもう、馬鹿なんだから。

ベッドに掛かる羽毛布団がかすかに上下している。腰を下ろした周囲に窪みはできていない。仰向けに寝転がる。左の手のひらで弟の顔を思い切りひっぱたく。規則正しい寝息が続いていた。

最初になくなるのは、触覚と味覚なんだよね。実際、必要ないんだけど。最後に触れたのは、あのときのトラックのバンパーだったな。固かったー。いや、バンパーっていうかボディの鉄板かな。そのあとのタイヤはもう分からなかった。じゃあ味覚はって？ 気分悪いけどさ、アイツのキス。いや、照れてるんじゃないよ。ごまかそうとしてるのがみえみえだったから、思い切り突き放した。怒鳴りつけて走り出して、最後の触覚まで20秒か。最っ低のキスだわ。どうせならコンビニに寄って、おでんでも食べとけばよかった。お腹空いてたんだよ。一緒にディナーのつもりだったから。それがまさか、ねえ。最後の食事はお昼のお茶漬。一週間前からダイエットしてやっと、あのデニムのスカートが入るようになってたんだよ。あーっ、腹立つ！ 嘘。もう五年経つからね。何だかなあ、もうどうでもいいや。父さんと母さん、めちゃめちゃ怒ってたよね。アイツがお葬式に来なかったから。あれさあ、家でびびってたんだよ。警察が調べに来るんじゃないかって。よかったね、お巡りさん来なくて。皮肉じゃないよ本当に。

弟の顔を間近に見下ろす。頬のにきびあとを爪で弾く。毛布を握って鼻のところまで引き上げる。思わず笑いが漏れる。

アンタさあ、馬鹿だけど、変なことに気づいてたよね。父さんや母さん、それから友だちがみんな、私が「あの世」とか「天国」とかに行っちゃったって言ったとき、ひとりだけ「姉ちゃんはこちらにいる！」って譲らなかった。アレって正しいんだよ。火葬場で人生最高にスリムになった私をつまんでみりゃわかるでしょ。私はそこにいたんだよ。どっかへ行っちゃったのはアンタたちの方。死ぬってね、船から川べりに降ろされるようなもん。そこからずうっと、離れていく船を見つめているの。ひっきりなしにひとを降ろしながら世界は進んで行く。二年前に凄い爆発が起きたよね。あれだって船の中で起きたことだから。忘れたつもりでもそのまま一緒に進んでいるんだから。甲板の上をいくら移動してみたって同じだよ。船からはね、逃れられない。川べりから眺めているとよく分かる。

こぶしを握って、弟の額を軽く叩いてみる。指先で鼻の頭を擦る。よく似た鼻がふたつ、向かい合う。

船が遠ざかると、そのうちに川べりからは見えなくなる。だから次に失われるのは視覚なんだ。波の立たない川面ばかり見つめていてもしょうがないってことなのかな。ちょうど五年目の命日が終わると何も見えなくなるらしいの。初めは怖かった。でも五年かけてゆっくりとわかってきたよ。すこしずつアンタは変わっていくし、この家や町、それこそ船そのものまでが別のものになって行く。変われないままに見つめ続けるのは川べりと船との埋めようもない距離を数えているだけだって。だからね、何も見えなくなるのはいいことじゃないかって。今はそう思っている。ぎりぎりでも間に合ったな。あのときは間に合わなかったけど。

羽毛布団の膨らみに身体を添わせる。膝を立てて足の付け根をぐりぐりと擦る。シーツの丸みは柔らかく上下を繰り返している。

最後まで残るのは聴覚と嗅覚らしいよ。ほら、お仏壇で鈴(れい)を鳴らしたりお線香を焚(た)いたりするでしょ。お墓に香華(こうげ)を手向けて、お盆には迎え火をするのも同じ。炎ってね、はぜる音がかすかに聴こえるし、薪(たきぎ)の燃える匂いもする。そういうのをよすがにしてこうやって家までたどりつくんだ。川のせせらぎを越えて。だからね、気をつけたほうがいいよ。このあいだのお盆明けにお墓参りに来てくれたよね。ミホちゃんもいっしょに。なんで家族の墓に恋人連れて来るのかって話だけど、アンタ本当はチャンスを狙ってたでしょ。いくらひとがいないからって、お墓の前でキスするのはやめてくれないかなあ。そりゃガン見したけどさ。これから先だって聴覚と嗅覚で何してるかは分かるんだからね。ていうか、お姉ちゃんから特に言っとくよ。アンタね、真夏の昼間、制汗デオドラントとUVカットを必死でキメてる女の子に、シャワーも使えないところで迫る男にだけはなるな！　そういうのが積み重なってある日、気持ちがすうっと離れて行くんだからね。そのときには気づかなくても別れたあとで思い出してブチ切れそうになるのって、そういうところなんだよ。あとね、いきなりいなくなったりするな。それは本当に反則だから。私が言うと説得力あるだろ？　別にいい男にならなくてもいいんだ。アンタにそんな大それた期待はしない。振られるのはかまわないんだよ。帰って来てから泣けばいいんだし。枕の下とか、そういうのも見逃す。来年からは私よりも年上になるんだろ。自分に甘い無自覚な大人になるんじゃないよ。目は見えなくなっても、腹くらい立つんだからさ。

梨地ガラスが闇から白っぽく切り取られ、色とりどりのイルミネーションがゆっくりと力を弱めてゆく。何度か寝返りを繰り返した弟は大きくしゃみをした。

そろそろ夜明け、なのかな。さっきまで眩しかった阿賀山さんちの飾りが見えにくくなってきた。空は白み始めているはずなのに、不思議だね、部屋の中はどんどん暗くなっていく。最後に見たのは弟の顔だったなんて格好悪いなあ。まあアンタだってせっかくのクリスマスイブを不発弾を抱えたままお姉ちゃんと朝まで過ごしたんだから、おあいこ。そうだよ、同じ年なんでもんね。まさかアンタとタメになるなんてびっくりだよ。五年前のあの日もこんなふうにして過ごしていたら、ちゃんと翌朝を迎えられたんだらうな。ふふ、なあんにも考えていないのが丸わかりのぼーとした顔してさ。あれ、アンタの顔が影になってきた。ああ、そろそろなんだ。もう一回ひっぱたいやりたいけれど、もうどこにあるのか分かんないよ。ぴーぴー泣きながらお姉ちゃんにかかってくるころ、見たかったのになあ。ねえ、せめて寝言でもいいから何か言ってよ。男はここぞというときには照れてないでちゃんと言えなきゃ駄目なんだからね。そんな根性無しを相手にしている女の子の身にもなれよまったく。どうしようもない馬鹿なんだから。何べんでも言ってやる。馬鹿馬鹿ば〜か。この馬鹿。

カーテンの隙間から冬の陽射しが床に落ちている。ガラスを覆っていた水滴は四隅を残してほとんど乾いた。羽毛布団と毛布を抱きかかえて、弟はまだ眠っている。もうしばらくすれば、洗濯を始められないことに業を煮やした母親が怒鳴り込んでくるだろう。布団から出た背中を丸めて、ときどき湊（はな）を啜（すす）っている。よく見ると、毛布を挟み込んだ両足は、いつの間にか赤と緑の靴下をきちんと履いていた。

（了）



七面鳥である。名は覚えていない。

なるほど鳥頭である。

そういうわけでどこで生まれたか見当もつかず、薄暗いじめじめしたところでぎゃーぎゃー泣いていたという記憶もない。人間を初めて見たときの記憶もなければ、いつの間にやら人間に飼われていたというのが吾輩のぎりぎり覚えている記憶である。その時の記憶というのが、ご主人の御嬢さんにスコップを持って追いかけられたというものである。御嬢さんとしてみれば特に悪意があったわけではなかろうが、記憶にある真新しいスコップの輝きがとても鋭利な刃物のように感じられて、とても恐ろしかったのである。そうそう、話す順番が逆になってしまったが吾輩の飼い主はご主人の細君（さいくん）を頂点として、御嬢さん、ご主人といったパワーバランスのご家族である。そろそろこの吾輩もご主人を抜いて家の中で三番目の地位を得ることができるのではなかろうかと思っているのだが、やはり人と獣の溝というのはなかなか深いもので、今のところは食卓の御主人の席を時たま占拠するという長期戦に出ているところである。吾輩が言うのも変であるが、七面鳥を飼っているだけあって家は一軒家。立派なものである。家のローンを抱え、さぞかしご主人の気苦労も絶えぬのであろうとは思っているのだが、どうやら細君の方が収入は多いようである。なるほどご主人の立場がないわけである。

そもそもなぜ吾輩がこの家で飼われているのか。友人が拾った雛（ひな）鳥をご主人が貰い受け、ひよこだと思ってもらって貰い受けたものが成長してみれば七面鳥だったというわけである。ひよこにしる七面鳥にしる何も考えずにもらってきたご主人は細君にこっぴどく叱られたものの、御嬢さんが吾輩のことをいたく気に入りそのまま住んでいるのである。

何もせずとも食事には困らないこの上なく楽な生活である。かといってぶくぶく肥るわけではなく、御嬢さんに追い掛け回されるのはそこそこいい運動になる。かといって追い掛け回されるのはあまり気分の良いものではなく、恐怖のせいで顔の色が変わる。興奮して顔の色が変わるのが七面鳥たる由縁なのであるが、吾輩としては平穏が一番、顔の色など変えたくない。しかし顔の色が変わるのが御嬢さんとしてはたいそう面白いらしく、余計に追い掛け回される始末である。

もう辛抱たまらんとって、くるりと向きを変え、翼を広げて威嚇すると、御嬢さんは泣き出してしまふのである。居候の身としては家主に逆らうのはあまりよろしくない。よろしくないがただ黙っているのも癪（しゃく）である。どうせ御嬢さんも次の日にはけろっと忘れてまた吾輩を追い掛け回す。たまには反撃もしなければやってられない。

そんなある日のことである。ご主人がテレビを見ていると、クリスマスの料理という番組が始まった。なるほど世間はクリスマス。人間の作った暦の上では今年ももうすぐ終わりというわけだ。吾輩も窓越しに奇妙な風習の日に振る舞われる料理の数々を見ていた。すると吾輩と同族

の姿が現れたではないか。七面鳥である。ターキーである。格調高きブロードブレステッドホワイト種である。が、次の瞬間驚愕の映像が映し出される。丸焼きにされた仲間たちの姿。それをうまそうに食らう人間たち。恐ろしさにかくかくと震えていると、何か嫌な予感がした。ご主人の方を見ると、こちらの方を見ている。それは肉食獣が獲物を見つめるような目だ。

食われる。

吾輩は食われてしまう。

そうだ。本来七面鳥はクリスマスか感謝祭の日に食われる宿命にあるのだ。

そして今日はクリスマス。

食われる。

そう思った瞬間、吾輩は家を飛び出していた。

駆けに駆けて立ち止まってみればそこは全くの知らぬ場所であった。これはしまった帰り道はわからないと思うが、よくよく考えてみれば帰ったらご主人に食われてしまう。このまま進もうと意を決して、歩き出すのである。思えば家の外に出たのは初めてだ。アスファルトから公園、車。言葉には聞いていたが初めて見る珍奇なものばかりでなかなか楽しいものであった。やがてたどり着いたのは堤防である。それを超えれば河原があり、ちょうどいい高さの草木が生い茂り姿を隠すにはちょうどいい具合である。この季節は草の種も虫も少なくなっているが、いざとなったら公園のごみを漁りに行けば何とかなるのではなかろうか。まあ、先のことを考えても仕方がないとほっつき歩いていると奇妙な毛むくじらの生き物がしゃべりかけてきた。

「おぬし、何もんじゃ」

「吾輩か。吾輩は七面鳥である」

「ほう。初めてみる鳥だな」

どうやらその生き物は猫というらしい。確かそんな生き物も窓越しで見ていたテレビに出ていたような気がする。どこから来たのかと問われ、元々は飼われていたのだという。何故、逃げてきたのかと問われ、食われそうだったのだという。

「おめえはペットだったんじゃないのか？なんで食われるんだ」

「吾輩は七面鳥だぞ」

「つまり、ペットだろ。ふつうペットは食わんだろ」

「ならばペットでは無かったのであろう」

「普通、食うか飼ってるもんを」

「いやいや、世の中には家畜というものがあってだな」

「けど犬や猫は食わないぜ」

「犬や猫は家畜ではないからな」

「じゃあ犬や猫と家畜の違いってのはなんだよ」

「うーん。そうだな。食用に品種改良されてきたか否かではなかろうか」

「ん？つまり美味そうか、不味そうかの違いってことかい」

「そう言えなくもないな」

「へえ、するってえとおめえさんは、食用品種ってわけかい？つまり美味いってことか」

「そうだな。吾輩は誇り高きブロードブレステッドホワイト種だからな」

「へえ、そいつはそいつは」

その時、猫の目の色が変わっていくのが分かった。これはご主人のあの時の目と同じである。

「まあ、落ち着け。吾輩を食っても美味くはないぞ」

「さっき美味いって言ったじゃないか」

「いやいや、そうだ。あれだ。腹を壊すぞ」

「でも、美味いんだろ？」

これはどうにも説得することは困難を極めそうである。猫の敏捷（びんしょう）性も鑑（かんが）みれば走って逃げることも難しいだろう。ならばここは、あれを試してみるしかない。もはや一か八かである。

猫が狙いを定めて飛びかかろうとした瞬間、吾輩は羽根を広げて地面を蹴った。思いっきり羽根をはばたかせ一気に上昇する。

飛べた。

これには自分も驚いた。

飛べたのである。

一度飛び立ってしまえば意外と飛べるものである。眼下には悔しそうな顔の猫。そんな猫を尻目に、ぐんぐんと高度を上げていく。

気付けば傾きかけていた日は沈み、街には明かりが灯っている。

煌（きら）びやかに輝く、地上の宝石。色とりどりの輝きが地上には満ちていた。

今日はクリスマスイブなのである。街の明かりは普段より一層明るくなっているのだ。

シャンシャンシャンシャン。

そんな音が振り返ってみれば赤い服に身を包んだ老人がトナカイを従え、微笑んでいる。

「メリークリスマス」

奇妙な怪人はそんな呪文を言い放つとそのまま通り過ぎて行ってしまった。

今日は奇妙なことばかり起こる。空を飛び、見たこともないような情景を目にすることができた。

満ち足りた気分である。

が、腹も減った。色気より食い気、花より団子である。疲れもあってだんだんと高度は下がっていく。

気がつけば見慣れた庭が目に入った。

あれは、我が家か。

我ながら見事な着地を決めると、庭から家の中を覗き込む。ちょうど夕食の時間のようだ。吾輩を認めた御嬢さんが駆け寄ってきて、吾輩を抱きしめる。いささか苦しい。まあ、食事にさえありつければそれでいい。今日はクリスマスということだけあってきっと豪華な飯に有り付けるのだろう。

それにしても吾輩は何故家出などしたのであろうか。

覚えていない。

なるほど鳥頭である。



#シーン1

真夏のある日。降り注ぐ蝉の鳴き声のシャワー。学校は夏休み。二人の少年が山に虫取りに。二人の少年は虫取り網と虫かごを手に山へと昇っていく。

「あっついね」

「あっついな」

「蝉の鳴き声がいっぱいするけど、蝉ならすぐにとれるかな」

「どうだろうな。蝉も意外と木の高いところにいるからな」

山道には草木が鬱蒼（うっそう）と生い茂って、ほとんどけもの道と言える。張り切って虫取りに出かけたものの、お目当てのカブトムシの姿はどこにも見えない。目算（もくさん）が甘かったと、二人の少年は少しがっかりした様子。

「なかなか、カブトムシはいないね。」

「そうだな。ここらへんだとな」

「今度お父さんに連れて行ってもらおうよ」

「いいなお前んちは。俺んちなんかそんなこと聞いてもらえないぜ」

「そうなの？気にしないで一緒に行こうよ」

「いいのか？」

「いいよ～。僕だって一人じゃ虫取り行かないもん」

二人は話しながら山を登っていく。ふと、足元に、

「わ、なんかいた！」

「何、なんだこの黒い虫」

その虫を捕まえるのに虫取り網なんていらなかった。片方の少年が、片手でつまみあげ、虫かごに放り込む。

「さっそく一匹」

「けど、こいつはあんまりかっこよくないな。ちょっと小さいし」

「この虫なんて名前だろうね」

「俺にはよくわかんないな。それより、もっといいやつ見つけようぜ」

「そうだね」

とりあえず、虫かごはそのままだに、二人はまた歩き出した。

#シーン2

二人はどんどん山奥へ入っていく。木立の中を歩きながら時には獣道にまで入っていた。けれどもけもの道は予想以上に深く、ところどころ木の枝が飛び出ている、やっぱり二人は断念した。それでも、何匹かの虫を見つけることはできたので、それなりに二人は満足することができた。

「いてっ」

「大丈夫か？けがすんなよ」

「うん、大丈夫」二の腕を擦りむいたのか、少年Aは、肌をさすりながらうつむきがちに答えた。

「うおっ、あれなんだ？」

少年Bの指差す先には、大きなルリボシカミキリがいた。

「すっげー、ルリボシカミキリだ」

少年はそう言って、飛び出す枝もなんのその、木に向かって猛ダッシュしていった。

「ちょ、ちょっと！」

少年Aはおいて行かれないように、必死でダッシュした。

少年Bが手づかみで虫かごに放り込み、急いで蓋（ふた）を閉めた。虫かごの隙間から、二人で一生懸命を覗き込んだ。

「すごいね。よく捕まえたね」

「へへー。すごいだろ。」

二人でまじまじとカミキリムシを見つめながら、戦勝を称えあった。

木々の枝をかき分け、元の木立の中を通る道に戻った。二人の少年は、森の中の湖へ向かった。

#シーン3

二人が湖についたとき、太陽はちょうど空の一番高いところにあっただ。二人で水辺に腰かけて、母親の作ったおにぎりを食べた。一方の少年がバナナを持ってきたので、二人でそれを半分こした。

「お前、用意いいな。」

「いや、お母さんが持って行けて。」

「へー、それならお前のお母さんにお礼言わないとな。」

「いや、いいよ。たぶん・・・」

「まあでも、家近いから顔合わせるとき結構あるし、今度言っとくよ。」

「あ、うん。」

少年Bが立ち上がって、湖畔の小さな小屋のほうへ行った。小屋の中には、錆（さ）びた車のエンジンのようなものがそのまま置いてあった。古くなったタイヤや、なんだかよくわからない小さなネジなども落ちていた。

「なんだろうな。これ。」

「うーん。よくわかんない」

少年Bが地面に落ちていたプラグのようなものを手に取って言った。

「もって帰ろ」

そう言って少年はポケットにプラグのようなものを突っ込んだ。

雨が降ってくるような気配はなく、二人の頭上で太陽は燦々（さんさん）と輝いていた。少年二人は汗をかきながらせっせと山の中を探検していった。

二人が見つけた湖は、周囲を木々に囲まれていて、二人が来た道の一本と、上流から流れてきている川辺くらいしか、他の場所へ通じるような道はなかった。

林の中は、木が茂って、薄暗く、苔が生えているところもあった。そういうところには少年たちは近づかないようにした。

湖の周りをぐるりと一周して、少年たちは、川沿いの道を登っていくことにした。魚が泳いでいるのが見えたが、少年たちは釣竿を持ってきていなかったのも、しばらくじっと魚を眺めていただけで、またすぐに歩き出した。

「こんど図鑑であの魚調べてみようぜ」

少年Bが元気に言った。

「この辺にはあんまり虫がないね」

「そうだなー。やっぱり木のほうにいるんだろうな」

「うん・・・また森の中に入って見ろ？」

「いや、俺はこの川がどこに続いているのか見たいんだ」

「わかった。じゃあ僕もついていくよ」

そうやって二人はまた歩き出した。二人の親が見ていたら、はらはらするような冒険である。よく両親は許可をしてくれたものだと思う。

しばらく歩いていると、道の傾斜が緩くなってきて、短い草が生えている、平地に出た。そこに、錆びて朽（く）ちかけた砲台があった。

「なんだこれ」

少年Bが興味深そうに近寄る。それを少年Aが遠くで見ている。

「おーい。こっち来てみるよ。中に入れるぜ、これ」

「う、うん」

そうやって少年Aも砲台のほうへ走って行った。

砲台の砲塔がある反対側に回って中を覗き込んでみると、少年Bがすでに中に入って、何かをい

じくりまわしていた。

「すげー。こっから外が見える」

砲台の内側はコックピットのようになっていて、飛行機のようなハンドルと、鉄板で覆われた装甲には長方形の監視用の窓がついていた。

少年Aも中に入って、その小さな横長の窓から外を眺めていた。視界の先には青々とした木々の葉っぱと、錆びた銃身が斜め45度くらいの角度で、まっすぐ伸びていた。

「これで、何か撃ったのかな」

少年Aがゆっくりと口にした。

「そうかもな」

少年Bが腕を組みながら言った。

「この辺に兵隊とかいたのかな」

少年Bがそう言うと、そのまま二人は黙ってしまった。

どこからか風が吹き抜け、さらさらと風が草木を揺らす音が聞こえた。どこからか男性の叫び声や怒号と、銃声のようなものが聞こえたような気がしたが、それはきっと二人の少年の勘違いである。

遠くでセミの鳴き声が響いていた。

何度かハンドルをがちゃがちゃと動かしてみたが、ロックされているのか、銃身が動くような気配はしなかった。少年Bは飽きたのか、ハンドルの前に座って、両手を頭の後ろで組んでいた。

少年Aは黙って後ろからそれを眺めていた。虫かごの中で、カミキリムシが退屈そうにもそもそと動いた。

ぽつぽつと雨が降ってきて、一気に豪雨になった。少年二人は、しばらくそこから動けなくなった。

「大丈夫。すぐ止むだろ」

「うん」

少年Bがそういったが、その予想に反して、雨は長く降り続いた。二人の少年は時計を持ってこなかったので、どれだけの間、雨が降ったのかはわからなかった。

二人でじっとしていると、突然霧（きり）が晴れたように、雲が切れて、太陽の光が差し込んだ。二人が外に出ると、むっとした水蒸気の熱気と、太陽に照らされてきらりと光る草露が見えた。

少年たちは外に出て背伸びをした。カミキリムシがぎーぎー鳴いた。

「カミキリムシって鳴くんだ」

「おおっ。俺も初めて聞いた」

太陽の光がだんだんと黄金色に染まってきたので、二人は道を引き返して帰ることにした。

「今日はここまでだな」

「うん」

そうって二人は急いで引き返した。

帰り道は早かった。川沿いを歩いて、すぐに昼におにぎりを食べた湖についた。それでも、日が落ちるスピードに追い付かれ、東の空は、青と紺色に染まっていた。

林道に入ってしばらくすると、コウモリが飛び始めた。さすがにこちらにぶつかってくることはなかったが、二人は歩くスピードを速めた。

だがしかし、日が沈むスピードに追い付かれた。森を出る前に、山から下りる前に日が沈んでしまった。

片方の少年は、半分泣きそうになっていた。「急ごう」ともう片方の少年が言って、二人は走り出したが、視界が悪かったせいか、片方の少年が転んでしまった。

痛みと空腹と寂しさが相まってか、ついに少年は泣き出してしまった。一方の少年が近づいて、体をさすってやると、少し落ち着いたが、なかなかえずくのが止まらなかった。

その間にも太陽は沈んで行って、あたりは真っ暗だった。転んでしまった少年も何とか立ち上がって、一方がもう一方の手を引いて歩き出したが、なかなか出口にたどり着かなかった。

風が吹き出した。少し寒気を感じるようになった。ばさばさと枝が音を立てるようになり、なんだかその音が近づいてきているようだった。

少年たちは怖くなって、走り出した。手をつないだまま走って行った。

突然、頭の上を何かが素早く横切った。なんだかわからなかったが、何かが少年二人の頭をかすめたので、さらに怖くなって、少年二人とも泣き出しそうだった。

走っていると、目の前に黒い大きな影が見えた。なんだかとても大きく見えて、二人は、途端に走る方向を変えた。方向はもう勘に頼るしかなかった。なんだか同じところをぐるぐる回っているようにしか思えなかった。

二人とも息も絶え絶えで、もうだめだ、と思った瞬間、一閃（いっせん）の光が走った。なんだか聞きなれた声もする。

二人は必死でその方向に走った。飛び出ている小枝なんか無視して、走り続けた。ずっと走っていたら何かにぶつかった。

お巡りさんだった。

「いったいなあ」

お巡りさんはそうって、おなかをさすっていた。端のほうには、お巡りさんが持っていただろう懐中電灯が転がっていた。

二人は、申し訳なさそうに、「ごめんなさい」とか細く言った。

遅れて、二人の両親がこちらにやってきた。少し離れたところでは、パトカーのサイレンが音もなく回り続けていた。

二人はこっぴどく叱られた。母親はほとんど泣き出しそうだった。片方の少年は父親に拳骨（げんこつ）をもらっていた。だがしかし、そのあと熱い抱擁（ほうよう）をもらって、なんだか

わけがわからなそうにしていた。

お巡りさんにも怒られた。パトカーに乗るかと思ったが、それはなかった。二人は一方の家が出したワンボックスカーに乗せられて、それで帰るようだった。両親がお巡りさんに謝っていた

。

二人は、困惑と疲労で何もしゃべらずに、シートに座って、ぽかんとその様子を眺めていた。その間、カミキリムシは虫かごの中で、もそもそと動いたり、じっとしたりを繰り返していた

。

帰りの車の中でも両親に小言を言われたが、あまり長くは続かなかった。

少年は想像していた。あれはなんだったんだろう。なんだか鳥に見えたような……。それにしても大きすぎるような。人をとって食べてしまいそうな雰囲気だった。

両目は金色に光っていて、体はほとんど闇と同化していた。

そんな想像をしながら、少年二人は眠りについた。



地球に生まれ育ったみなさまには少し想像が難しいかもしれないが、その星は、一面緑色で覆われている。たとえばあなたがロケットに乗ってその星に向かうとする。大気圏に突入して大地が見えてくると、地平線の先の先まで、鮮やかな緑で埋め尽くされているのがわかるだろう。それは太陽の光を受けてきらきらと輝いている。地球に生まれ育ったみなさまは、もしかすると、眩（まぶ）しすぎて一瞬目がくらんでしまうかもしれない。ロケットがゆっくりと降下し、ついに地表に近づいてくると、その緑が、一面の森であることがわかるだろう。もちろん、本物の森だ。本物の木が、本物の大地に根を張って、太陽と雨の恵みを受け、空に向かって背を伸ばし、肩を寄せ合って集っているのだ。地球に生まれ育ったみなさまは見たこともないだろう、本物の森である。

無論、その星にだって、最初から本物の木が自生していたわけではない。この星の生命たちは長い間、ただの土くれだったのだが、そこに、地球人、つまりみなさまの遠いご先祖さまがやってきて、土くれたちに、ほんの少しの自我と、ほんの少しの意識と、技術と、お金を与えて、地球で使うための木を栽培させるようになった。

土くれたちはほんの少しずつ成長する。形を持ち、次第に歩くようになり、意志を持つようになり、感情を持つようになるまで、地球の単位で言うと200年ほどの時がかかった。

たとえば、北の方の森では、もみの木が連なっている。もみの木たちを世話をしているのは、土色をした、胴体と、二本足と、二本の腕と、まるい頭を持った、シンプルな形の土くれたちだ。この森では、地球でいつも年末に行われる子供向けのイベント用にもみの木を栽培しているのだが、ある時地球の子供が気まぐれに綴（つづ）った土くれたちへの「お礼のお手紙」に、香ばしい焼き菓子が同封されていたのだ。

「もりのほしのみなさん、ありがとう。もりのほしのみなさんも、くりすますにじんじゃあぶれっどまんをたべてください」

土くれたちは、文字が読めないどころか、ものを知らず、自分たちが何故もみの木を育てているのかも理解ができておらず、ましてこの大気圏を抜けた先の宇宙のことなど考えもできなかったが、そのとき唐突に、その手紙と焼き菓みに、うれしさのような、いとしさのような、さみしさのようなものを、ほんの少しだけ、抱いたのだった。

そしてもみの木の森の土くれたちはじんじゃあぶれっどまんの形になった。

「やあ、おはよう、ぽおー」

夕暮れ時、一体の土くれが、もう一体の土くれに声をかけた。のそのそ歩いていた土くれは立ち止まった。それから、最初に声をかけた方の土くれは、しばらく黙っていたが、そのうち、自分が何をしようとしていたのかも忘れて、ただ黙って歩き出した。ぽおーと呼ばれた土くれもまた、別の方向へ歩き出した。それから、また別の土くれに声をかけた。

「やあ、こんにちは、ばあー」

ばあーと呼ばれた土くれは立ち止まった。

「やあ、こんばんは、ぶー」

実際のところ、誰がばあーでぽおーでふうーなのかは、彼らにとってあまり意味がなかった。すべてがばあーでありぽおーでありぶーだったし、すべてがこの星の大地から生まれた名もなきただの土くれだった。

「北の方の木が一本、立派に育ったようだよ」

とばあーともぶーともぽおーとも知れない土くれが言った。

「そうかい、じゃあまた、遠くへ行ってしまおうんだねえ」

と、ばあーともぶーともぺえーとも知れない土くれが返した。

土くれたちが育てたもみの木は、立派に育つと、地球から来たロケットに乗せられて飛びたっていく。そういう決まりになっている。土くれたちはそれを、朝が来たら日が昇ったり、雨が降ると地面が濡れるのと同じことのように感じている。それでも時々、自分たちの育てたもみの木が森から消えることについて考える。それまでずっとそこに根を張って、日々ゆっくりと成長していた木が、ある日突然、跡形もなくいなくなってしまうのだ。

今も、ばあーともかあーともけえーとも知れない土くれは考えている。いなくなってしまうものについて。南の方を向く。あら、消えていくのは東の方の木だったかしら？ 東はどっちだろう。そうしてきょろりきょろりと辺りを見回す。そうしているとだんだん、なんでここにいたのかも忘れて、またとぼとぼと森の中を歩き出す。森の中はうんと静かで、日が沈むと真っ暗になる。冷え込んだ空気の中に、土くれたちがあてもなく歩き回る鈍い足音だけが一晩中響きわたっている。土くれたちはこういう夜に、時々、この星を去っていく木のことを、もう少しだけ覚えていたいなあと思う。ほんの少しだけ。ほんの少しだけ。

ところで地球のみなさまは、通販で購入したクリスマスツリーに、時折、不思議なものが付着しているのを見つけたことはありませんか？ たとえば、きれいな小石とか、もみの木ではない木のきれいな形の葉とか、木の実とか。

それは、地球の子供からもらったジンジャーブレッドクッキーのことを時折思い出して、ほんの少しだけ覚え続けられていた土くれが、それを真似してもみの木にくくりつけた、地球人へのプレゼントなのです。



世の中っていろいろだ。

人間もいるし、犬もいるし、桜もいるし、クワガタもいる。ピーターパンはいないけど、シーラカンスはいるらしい。そんな世界には歓迎すべきうれしいこともあれば、悲しむべきイヤなことだってある。

ここはレバリーランド。

とある国が、ずっと秘密にしてきた閉ざされた島で、僕はこの島に狩りに来ていた。何を狩るって？ 何だと思う？ 狐？ そんなかわいい動物を狩ったりはしない。

僕が狩るものはうつくしい花。

僕はプラントハンターだ。

植物を主に扱っているけど、メインはめずらしい花の採集。

まだ見ぬすばらしい花を手に入れるために、ここにやってきたというわけ。

「おい、はやくこいよー。ミギルカ」

オウムのカレハが僕の前をぐるぐると飛びながら言った。

「そっちは飛べるからってずるいんだよ」僕は言い返す。

「鳥が飛べて何がずるい」

「飛べない鳥だっているし、動物として考えれば飛べないほうが多いだろ」

「理屈がおかしい。いいよ、じゃあ飛ばないから」

カレハは、一旦、前進するとUターンして僕のほうに猛スピードで突撃してきた。

「ひい」っと目を瞑った瞬間、バサッと大きな音がして、僕は肩におもみを感じる。カレハが僕の肩にとまったのだ。

「重い」

「飛ぶなっていうから、しょうがない」

「歩けばいいじゃん」

「ミギルカみたいに立派に走れるような、ずるい足はついてないんだよ」

「僕が走れたらずるいのかよ」

「さっき、誰かさんがそんなこと言ってたよ」

「誰だよ、そいつ」

「さあね」

カレハは僕の頭に飛び乗って、浮き上がるとバサバサと羽ばたいてからまた肩にとまった。

「どこかの止まり木だったかも」

「木と会話できるなんて変な鳥だな」

「ミギルカに言われたくない」

僕とカレハは、島の森の奥へと進む。この島に人間は住んでいない。許可をもらって船で送ってもらいはしたけど、その人も予定の日に迎えに来ることになっているから、今はもういない。だから野宿して、目的の花を見つけるまで僕とカレハだけでどうにかしなくちゃいけないんだ。

ある程度、島を進んだところで、日が落ちたので、今日はここで留まることにした。今のところはまだ時間があるので、無理に夜、進む必要はない。それにカレハは鳥目だし。

「今日のごはんは何？」カレハが聞く。

この島は南のほうにあるため、たき火が必要なほど寒くはない。テントをはって、その外側にランプをぶら下げている。森の中で球体の光が広がるようにゆれていて、僕とカレハはそんな結界に守られるような心地で夕食の準備をしていた。

「カレー」

「またか」

「他になにがあるっていうの」

「ないけどさ、なんというかもうちよっと食べやすいものがあるな」

カレハがとことこ歩いて、僕の横の鍋の近くに寄った。

「くちばしってはずしたり、その羽でスプーンもったりできないの？」

「夕食、地面にこぼしたいの？」

「なべ、あついよ？」

「じゃあ、木の枝落とそっか」

「ごめんなさい」

僕はじぶんの皿にカレーをよそって、それからカレハ用の器にもよそった。食べにくそうなので、スプーンですくってあげる。食べにくいとかの問題よりもオウムがカレーを食べて大丈夫なのかはちょっとばかし気になるけど、カレハ普通のオウムじゃないし、鶏肉もいれてないのでまあいいんだろう。

夕食を終えて僕とカレハはテントの中で布団にくるまっていた。明日はどこまで進もうか、そんなことをマップを見ながら話していると、ある気配を感じた。

花の気配。

それも……。

「逃げるぞ！」

僕が叫ぶより早く、カレハはテントから飛び去った。薄情なんじゃない、罠（おとり）になるためだ。僕がテントから出るとトラがカレハを捕まえようと必死になって頭上に手をのばしていた。

フラワータイガーだ。

でも、お目当ての白い奴じゃないし、咲いてない。

黄色と黒の縞（しま）模様を持ったトラの頭にはピンクのつぼみがゆらゆらと揺れていた。

よくわからない明かりをみつけて、僕らのテントを襲いに来たのだろう。

「こいつどうする？」カレハがくるくると回りながら言う。「狩る？」

「まあ、練習にはなるから殺さない程度で」

「了解」

カレハが回る範囲をひろげる。走らせて、疲れさせて、バターになったりはしないけど、いらだたせる分には効果的。僕はテントに戻って鞆をひっぱり出した。中からペンの形の針を取り出す。さきっぽから少しだけ出ている針には麻酔が塗ってあるのだ。このトラが簡単に失神していもうような強力なものが。

「ミギルカ！」

カレハが飛ぶ方向を変えて僕のほうへと飛んでくる。一直線にスピードをあげて突撃してきたカレハは、僕の顔の前で大きく羽を広げ、そして急上昇する。

目を閉じたりはしない。

それが信頼という奴。

遊びじゃなければ、

カレハがぶつかったりはしない。

消えた翼の影からはフラワータイガーが現れた。

向こうからしてみてもいきなり僕が現れたようにみえただろう。

僕はふみこみ、右手に握りしめたペン針をトラの額めがけて突き刺した。

トラの振り上げた鋭い爪がカウンター気味に僕に振り下ろされる。

トラは眠るだろう。

麻酔で。

だけどその腕までが急にとまったりはしない。

僕の、

すぐ、

目の、

前に、

振り下ろされるトラの爪を僕は全身をふるわせて力をこめた左腕で受け止めた。盛大に鈍い音。だけど僕はふきとばされたりはしない。足から根を伸ばし地面を掴んでいた。

トラが眠りにつき崩れ落ちる。

僕は埃（ほこり）を払って鞆からカメラを取り出した。一応、記念にフィルムにおさめておこうと。

僕とカレハは植物生物だった。とある研究所で造られたほんとうは存在しないはずの生き物。僕は身体が木でできていて、成長させたり、枯らして軽くしたりすることができる。

カレハも枯れ木を翼の骨の代わりにしている。

世の中にはそういった特別な奴らが隠された状態でそこら中に存在している。このトラや、僕らみたいに、逃げ出して、好き勝手、生きていたりね。

だから僕とカレハは、そんなめずらしい奴らを狩りに来たのだ。写真に撮って世間に公開するために。

少し離れたところに失神したトラを置き、近くに匂い花を置いておく。目を覚ましたトラは、この花から香る金属が発酵したような匂いを覚えて、僕らのようなテントを襲わなくなるという仕組みだ。

「さて、落ち着いたし寝ようか」僕はカレハに言う。

「ミギルカ大丈夫？」

「なに、心配してくれるの？」

いくら僕が植物の人間とはいえ、あまりにケガをすれば倒れたりはずる。だからカレハ心配してくれているのかなと思った。でも、違った。

「そりゃ心配だよ、咲いているホワイトフラワータイガーは情報によると普通の四倍ぐらい大きいらしいし。ちゃんとできるの？ ミギルカがやられたら逃げるよ」

「そっちかよ！」

「当たり前だろ！」

僕は木の蔭（つた）のようにした腕を伸ばして狭いテントの中で逃げ回るカレハをつかまえようと追い回した。

「待てこら」

「いやだね」

「明日の朝はチキンカレーにしてやる」

「またカレーかよ！」

「そこかよ！」

夜は更けていき、どこかに大きな遠吠えが響いた。

みんなにハッピーあれ（この本がでけるまで）

「はじめに」にも書いたけどー。

ここに載せられている作品は、主にクリスマス用に書かれたものなのだった。

小説投稿サイトてきすとぼいでボクちんが呼びかけて、そうして集まった作品なのだった。

てきすとぼいは、大勢の人に開かれた広場みたいなところで、ツイッターのアカウントがあればダレでも小説に関するイベントが開催できるサイトでー。

ボクちんもちょくちょくイベントを開いていたのだからー。

そんな中で、「面白い書き手がいっぱいいるし、もっとナニか可能性があるんでないか？」と思うようになったのだ。

ちゅーか、実を言うと、ボクちんはとある理由から、子供の頃にクリスマスをやった記憶があんまなくてー。

それはそれでいいのだけれど、オトナになった今、届けられるものはないかと考えたワケでー。

それで、てきすとぼいの人たちの力を借りて、「みんなで、ほっこり ハッピー・クリスマス掌編賞」ちゅーイベントを立ち上げてみたのだ。

集まった作品は電子書籍化して、養護施設に贈る予定だったのだけど、ボクちんのお仕事の事情で遅れに遅れて、年をまたいでしまいー。

締め切りに合わせて書いてくれた参加者のみなさんには、ごめんちゃい。

あと、準備期間中に、何方所かの養護施設の方々に、「こんなの作ってます」と問い合わせたけれどー。

やっとこうして完成したので、もしよかったらみんな読んでほしいのだ。

もしかしたら、読んで思うことがあったり、ネット環境の問題もあったりするかもだけど、ご配慮いただけたら、感謝感激あめあられなのだ。

なお、表紙に関しては、てきとぽいメンバーの森™ちんの力作である。

てきすとぽいにはいろんな参加者がいるので、ふだんあまり交流がない人もいて、森™ちんもその一人だったのだけどー。

表紙デザイナーを探していたところ、ぱっと手を挙げて立候補してくれたのだ。

そういうワケで、この本はいろんな人たちの協力のおかげで完成したのだ。

ナニかと気にかけてくれたU.C.O.ちんはじめ、ツイッターのフォロワーの皆さん、それとボクちんの知り合いであるちゃちゃちん。

サンキューベリマッチ。(●w●)/

ほんでもって、作者のみなさん、別イベントからの転載を快諾してくれた犬子ちんも、どーもどーも。

この本の読者がどれほどいるのか分からないけど、一つひとつの作品が会ったことのないよい子のために書かれたものなのだ。

みんなふだんオトナ向けの話を書いているから、ちと難しかったりするかもしれないがー。

いつか、ふとした時に、「そういえば、昔こんなことがあったなあ」と思い出してもらえたら、ウレシイかもー。

ちゅーことで、長々と失礼のインドカレー。

ほんじゃ、またぬー。

2014年1月　　しゃん（発行人）

問い合わせ（ツイッター・アカウント）　<https://twitter.com/syan1717>